



IBDとは

消化器内科部長 大内 佐智子

IBDとは炎症性腸疾患(Inflammatory Bowel Disease)の略で、主に潰瘍性大腸炎とクローン病を指します。潰瘍性大腸炎は主に大腸にびらんや潰瘍を作り、血便が出るのがほとんどです。一方クローン病はすべての消化管に潰瘍を作り、腸管が狭くなったりしますが、血便が出ることは多くなく、下痢や体重減少、繰り返す腹痛など、非特異的な症状が中心です。発症年齢のピークはいずれも20歳代(図1・図2)と若年で、学校生活、受験、結婚、仕事など、それぞれのライフステージの中で、病気といかにうまく付き合いながら社会生活を営んでいくかが重要になってきます。

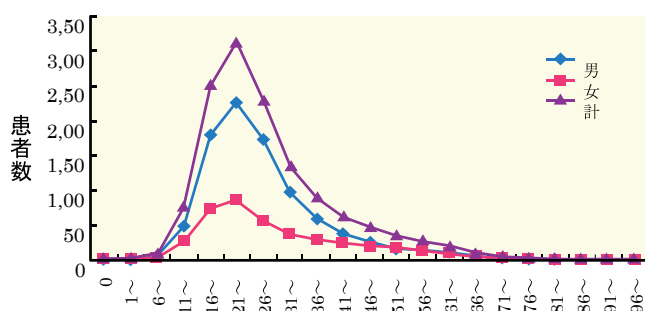
近年、罹患者数はどんどん増加し、クローン病は4万人、潰瘍性大腸炎は15万人を越すようになりました。この疾患群は未だに病因が解明されておらず、国が定める難治性疾患:特定疾患に指定されていますが、昨年度より制度が変わり、医療費助成は制限され、軽症の方は指定から外れるようになりました。

潰瘍性大腸炎は約7割の方が薬で病状をコントロールできていますが、中には慢性持続型で、なかなか病状が落ち着かず、治療抵抗性の方がおられます。安倍首相がこのタイプではないかと言われています。このようなタイプの患者さんには通常の抗炎症薬(5ASA製剤)に加え、ステロイドや免疫調整薬、生物学的製剤である抗TNF 製剤などで強力に免疫を調整することが、内科的治療の最終手段になります。

クローン病は潰瘍性大腸炎とは異なり、ほとんどが慢性持続型で病状は進行性です。しかしながら、潰瘍性大腸炎でも使われている抗TNF 製剤が著効することが多く、病勢のコントロールは飛躍的に容易になりました。その結果、この生物学的製剤が登場する以前には考えられないほど、生活の質が上がり、ほとんどの人が発症前とかわらない生活を営むことができるようになってきました。この抗TNF 製剤は高価ではありますが、非常に治療に貢献していることから、世界で最も売れている医薬品の上位を占めています。日本の医師は特に多く処方していると指摘され、しばしば関係者の間では問題視されていますが、このような特効薬が、安価に、安全に使用できるようになることを祈っています。



クローン病初診時年齢別患者数 (図1)



潰瘍性大腸炎推定発症年齢別患者数 (図2)

